

「会報かんきょう vol. 36」

環境セミナー「気象予報士から見た地球温暖化の現状と気象災害の今後」

掲載記事の一部補足説明につきまして

掲載内容に一部補足説明が必要とご意見が講師からありましたので、以下のとおり補足いたします。

=====

1. 用語の世界標準と日本の違いについて

1) 「変化」とは、平年状態が長期的に変わってゆくことをいいます。日本では、過去30年の平均を「平年値」といい、10年ごとに更新されます。現在の平年値は、1991年～2020年の30年の平均値です。

一方、「変動」とは、平年状態に対する短期的な偏りやゆらぎ(高い低い・多い少ないなど)をいいます。

2) 異常気象も極端現象も、基本的には「平年状態から大きくかけ離れ、稀にしか発生しない気象現象」を表しています。

気象庁では「異常気象」を原則「ある地点・ある時季で30年に1回以下の現象」と定義していますが、基準に関わらず社会に大きな影響をもたらした現象も監視しています。

一方、国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)でいう「極端現象」は、その発生確率分布の上端10%以内(極端に高い・多い)、或いは下端10%以内(極端に低い・少ない)の現象を意味し、30年に1回以下よりはその発生頻度が比較的高い現象も含んでいます。気象庁では日最高気温35℃超の猛暑日や、日降水量100mmの大雨なども含んでいます。

4. 気象災害について

今世紀末の世界平均気温が産業革命前と比べて4℃上昇するシナリオ(現時点を超える追加的な緩和策を取らなかった世界)では、日本沿岸の平均海面水位は約70cm上昇すると予想されています(気象庁、日本の気候変動2020)。

=====

千頭 望(ちかみ のぞむ)

気象予報士(日本気象予報士会会員)

静岡県地球温暖化防止活動推進員

富士宮市生涯学習指導者

富士市環境アドバイザー